病院内学級で有効なICT活用

孤独感や学習の遅れに対する不安を軽減

東京都立光明養護学校　赫多久美子教諭

＜プロジェクト以前＞

そよ風分教室は、100校プロジェクトの参加校唯一の病院内学級です。様々な苦労を経て、そよ風分教室のWebサイトを立ち上げた先生が異動となり、平成９年度の新100校プロジェクトから13年度までの5年間、私が担当を引き継ぐことになりました。私自身は、開始当初ICTについて全くのビギナーでした。自宅にコンピュータと周辺機器を揃えてインターネットに接続してみたものの、不慣れと「担当者になってしまった」ことのストレスは大きなものがありました。

実践の経過、教訓

様々な人のサポートを受け推進

分教室は、病院に隣接した小児医療研究センターの専用回線からインターネットに接続していました。プロジェクトで支給されたサーバは、センター地下のコンピュータ管理室にありました。サーバがダウンした時などは、人気のない地下室に行き、祈るような気持ちでリセットボタンを押します。復旧するまでの間、生きた心地もしない、といった経験をしています。他にも多くの困難な状況が発生しましたが、その都度、周囲のパワーユーザに助けていただきました。光明養護学校本校の教員や国立小児病院の医師の方々です。またエンジニアやデザイナーなどの友人、メールボランティアの方などに、電話や電子メールで相談にのっていただくなどのサポートを受けました。

10年度には、新100校プロジェクト成果発表会で、「病院内学級におけるパソコンおよびインターネットの活用」について発表させていただきました。その後、取材を受けたり、ICT関連の場で話をしたりする機会が増えました。一般にあまり知られていない病院内学級の存在を広く知っていただくためにも、そよ風分教室のICT活用の取り組みについて積極的に発表するようにしました。

この他、分教室在任中に「双方向動画通信ベースの仮想空間を用いた院内学級システム」（IPA「教

そよ風分教室でのICT活用

東京都立光明養護学校 そよ風分教室は、平成4年から院内訪問学級の期間を経て、平成７年に東京都世田谷区の国立小児病院内に開設された。その後、病院の統廃合に伴い、平成14年3月に開院した国立成育医療センター内に移設された。現在のインターネット回線は、東京都教育委員会の予算によるADSLであり、病院のLANとは別になっている。

在籍しているのは、病気治療のため長期の入院を余儀なくされている子どもたちである。入退院による入れ替わりは激しいが、全国から常時30数名の小学生、中学生、高校生が院内学級に在籍し、12名の先生より、授業を受けている。

インターネットは、入院中の子どもたちにとって、病院内にいながら外の世界とのつながりを実感できる手段である。また、調べ学習では、図書館代わりにもなる効果的なツールとなる。

授業では、小学生は総合的な学習の時間や各教科で、中学・高校生はプレゼンテーションや「表現」をテーマにした活動等にICTを活用している。各教室や図書ラウンジにある端末は、休み時間や放課後に子どもたちに開放されている。子どもたちは、趣味の分野に関する情報を検索したり、ネットゲームを楽しんだりしている。

Webサイトに子どもたちの様子や作品を発表し、広く院内学級の存在を知ってもらう努力をしている。閲覧した方々から感想や応援のメールが届くこともあり、担当者の更新作業の励みになっている。
http://www.komei-sh.metro.tokyo.jp/soyokaze/index.htm

15年度には松下視聴覚教育助成を受け、携帯型テレビ電話等を活用した「校外探索」等の研究にも取り組んでいる。

育の情報化推進事業」採択)、「マルチメディアを活用した補充指導についての調査研究」(文部科学省指定)といった研究に携わりました。

「賢い患者」となるためのICT利用を

そよ風分教室のOB・OGには、様々な困難・障害がある世の中を自分の判断で歩ける人になってもらいたい、と思っています。具体的には、病気療養の観点から「賢い患者」になってもらいたいのです。今後の情報化社会では、医療の現場でも患者側に様々な情報が提供されるようになり、医者任せではなく、自分自身で治療や服薬の選択をしていかなければなりません。一方、インターネット上の情報は、よく言われるように玉石混交です。「自分自身で冷静に考える」、「本当に必要な情報か、正しい情報かを確かめる」、「自分の身を守るためにはどうすればよいかを考える」といった習慣を身につけさせたいと考えています。

PCは院外と交流し、学習するツール

そのため、情報モラル・セキュリティ・ネチケットに関する指導、また文字入力の基本であるキーボード操作を重視してきました。

退院して、元の学校に戻ると、他の子どもたちよりICTの活用がうまくできる、ということで「自信につながる」という声も聞きます(囲み欄参照)。

機器のトラブルに苦労

初心者にとって、機器のトラブルへの対処やメンテナンスは大きなプレッシャーでした。授業中に「コンピュータが動かなくなった」と呼び出されることもたびたびありました。機器の台数が増え、教員や児童生徒の活用頻度も増していくと、トラブルもまた増えていきます。一般の教員が通常の職務をこなしながら、それらに対処する限界を感じました。

10年間を振り返って

「恩返し」がICT活用の原動力

私がICT活用を続けてきたのは、病気療養している子どもたちにとって、インターネットが孤独感、勉強が遅れるのではないかといった不安感を軽減してくれる有効な手段であると分かったからです。例えば、前籍校の先生・友人とのメールによる交流により、「早く治って、みんなの待つ学校にもどりたい!」という意欲につながります。また、遠隔地に住み、頻繁に面会できない家族とのメールのやりとりは、子どもたちにとって大きな励みとなります。

また、私自身様々な方のサポートを得て、これまで取り組んで来ることができましたが、「良いサポートを受けている人間は、良いサポータになれる」ということを自ら実証することで恩返しをしていきたいと思っています。

<成功の秘訣>

そよ風分教室は、LANの整備、インターネット接続、コンピュータの台数、教科用ソフトの種類数などの面で比較的恵まれた環境にありました。それに加え、教員数も少なく、教員間に密な交流が可能だったので、先生方にICTの活用がスムーズに広まったのではないでしょうか。

私が行ったのは次の3点です。

1つは、他の先生方にICTを活用していただくために、個人のニーズに応じたサポートをできる限り行ったこと。2つめは、子どもたちにICTを使った情報の収集や発信の楽しさを教えたこと。自分の発信した情報に対し、外の世界から感想や応援のメールが届くという「あたたかい」ネット経験をした子どもたちも多くいます。3つめは、子どもたち同士の教え合いを促すようにしたこと。新しい機器やソフトの使い方も1、2名に教えた後は、「○○さんがよく知っているから聞いてごらん。」とアドバイスするだけで、技術伝達のルートが広がっていきました。子どもたちが使えるようになると、今度は先生方に子どもたちが操作の仕方を教えるような場面も出てきます。

このように、ICTは、人と人とをつなげ、そのつながりを深めるためにこそ活用されるべきだと思います。